巻頭言

臨床心理学部長　岡田　康伸

京都文教大学の臨床心理学部では、2006 年度の卒業生から精神保健福祉士（以下：PSW）の国家試験受験資格を取得できるようになり、以後、臨床心理学的な素養をもつ PSW 資格取得者を医療や福祉分野に送り出すようになってきた。

現在、臨床心理学部では PSW に加えて、児童福祉に携わる人材の育成を目指して、資格関連の新しいコースもしくは学科を立ち上ようとしている。そのためには実習教育を充実させる必要があるが、多くの福祉施設や精神科医療機関が集中しており、様々な障害をもつ人たちが生活している地域であるという本学の立地条件を生かした創意工夫が望まれる。

本学では、従来から地元の精神科医療機関や福祉施設などとタイアップして、学内実習を可能とする学習環境の整備を図ってきた。これらを充実・発展させることによって、資格をとろうとする学生のみならず、それ以外の学生と地域の関係機関や障害をもつ人たちとの交流の促進を図る所存である。以上については、教育の観点からは、学生に様々な刺激を与える学内実習施設の整備につながると同時に、地域貢献の観点からは、大学のもつ様々なリソースが活用できる社会資源の整備につながるという二重の意義があるからだ。

京都文教大学臨床心理学部の特徴としては、社会的支援を捉える場合に、学部名称である「臨床心理」という視点を常に念頭に置いていることが挙げられる。対人援助の資格関連のカリキュラムは、臨床心理学部内に設けられることにより、大きな意味をもちうる。支援は社会的なものとしてのみ捉えられがちであるが、個人を大切にする視点は臨床心理学部の神髄であり、京都文教大学の出身者の特徴でもある。このように、個人のこころを大切にする教育から培われた臨床心理学の素養は、援助職を目指す学生のみならず、企業就職を目指す学生たちが共通して持ち合わせている本学の財産でもある。

社会の変動が激しく、それに合わせた社会保障も重要だが、だからこそ個人を大切にする考えも重要になってくる。また、子どもや老人などと区分することなく、むしろ包含した考えや設備の充実が求められるのではないか。大学内にこのような設備を備えることも実習教育や、地域連携の新しい試みであろう。新しいことを始めるのにはさまざまな困難がつきまとうが、「心理社会的支援研究」という新しい紀要を作ることで、さらなる発展の下地にしたい。